

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成19年1月5日発行(毎月5日1回発行)
第42巻1月号(通巻570号)

風土



かいつぶり

神蔵器

桂郎の綿虫波郷の雪蛩

むらさきはやがて本気に式部かな

桂郎忌日をする音の穴まどひ

一村の水引き寄せて障子洗ふ

黒門に弾痕しるし帰り花

冬立てりイソプ橋よりパンダ橋
産土に柄杓一つや柗咲く
不忍池に白鳥待てば鴨の来て
水押して冬日をすくふ鴨の嘴
かたまれることは倅せ枇杷の花
枯れるもの枯れて玉なす日が一つ
かいつぶりこころ急かれてあたりけり



竹間集

同人作品



桐 一 葉

外川 玲子

終ひの声風がさらへり敗蓮
山影のひろがつてゆく芒原
時雨忌の空深くなる水辺かな
枯野ゆく白い太陽まんやかに
書き写す百句の重み桐一葉
鎌倉の沖より昏れて夕霧忌
冬蔦ののぼりきつたる空のこり

ほとけのこ糸

山田 暢子

吟行の始め櫃の実拾ひけり
生きてまた高館に秋惜しみけり
風のこ糸聴き分けてある花野かな
刈田より刈田へ朱き橋渡る
銀漢へ流れて衣川といふ
紅葉のまつただ中に毛越寺
冷やかやほとけのこ糸と思ふまで

蛇穴に入る

門伝 史会

蛇穴に入る中尊寺十八坊
逝く秋の浄めの雨や平泉
関山を砦となして刈田かな
義経堂櫃の実落つる音の中
芭蕉みち白鳥飛来の川を越す
小春日や菓子舗の庭に汀女句碑
堀の上鬼の子蓑をかつぎゆく

身辺雑詠

— 塩田 博久 —

物置に古き農薬蚯蚓鳴く
古書市を漁れば釣瓶落しかな
昭和史に耽りて灯火親しめり
学級田伸び放題の穰かな
柿を挽ぐ吾を烏の見てをりぬ
遠山の色に急かるる冬支度
煙草の香残る原稿夜半の秋
かたはらに悪筆番付夜の長き
色変へぬ松や俳句は日本でこそ
願ふことまだ残りをり流れ星

海外吟を試みて

校正二句

文具店に刻樂しめり神の留守
朝餉の卓パン屑にある冬日かな
顔よりも大ききリボンや七五三
サツカー少年ボールを蹴れば落葉翔つ
町内に落葉を掃かぬ家一軒
芭蕉忌や俳句は一句にて足らふ
横浜に遊里のむかし一の酉
かねやすの前に人待つ一葉忌
数へ日や地下駅までの九十九折
富士晴るる卓にぴしりと寒卵

山河集

同人作品



神蔵器選

旧吹上町吟行 二句

棒稲架や金色堂を守る村
蓮の実飛ぶ音を聴きゐる仏かな
旅寝して雁の声きく衣川
蕉翁の笠に弾みて木の実かな
もてなしは大きてのひら小鳥来る

浅田 光代

萩の風萩の筆選る白毫寺
小鳥来る白毫律寺の御仏に
稲滓火這ふ北上川の古戦場
三代の栄耀十月桜咲く
逢ひたくて来し高館や榎の実降る

橋添やよひ

西行の山もみづるさくらかな
大刈田むかし敵の矢味方の矢

束稲山

柴田 久子

コスモスの風を句帖にはさみけり
白井権八のゐさうな祠つづれさせ
のど仏なき石仏や小鳥来る

秋澄むや大浦天主堂仰ぐ

長崎

及川 澄江

鳥渡るわが国鉄道発祥地
一村の共同墓地の鶏頭花
提げて来る権六谷戸の烏瓜
紫苑咲く永井博士の如己堂

蓑虫鳴く弁慶笈の椿紋
一文字を束ねる在や伽羅の御所
弁慶の松とも一樹色変へず
日和よき伽羅御所跡や芋莖干す
みちのくの雨の二日や冬桜

下山田美江

風土賞作品

雪の鶴川

橋添やよひ

かなかなの声のさざ波か悦やの里
水音の貴船百戸や星月夜
念仏や吹き漕めては十夜粥
国引の出雲や戸毎干菜吊り
水うまし出雲くにはら冬初め
湖の日を砦囲ひに干瓢干す
水漬舟入れて淡海の枯れにつく
目裏に金閣炎上今朝の雪



田終ひの煙立ち上がる桂垣
川一筋寺領に走り年詰る
鶴川の雪を泣かせて釜の噴く
待春や正子手描きの百人首
水干の美男より買ふ懸想文
国宝の堂の出入りや雀の子
久女忌や薔薇の冬芽の真くれなる
楮晒す邑の真中を雪解川
リラ冷えや湖北に二艘丸木舟
中京に残す本籍業平忌
西行のこゑを吉野に苔清水
神域の馬場やこぞりて松の芯

新人賞作品

雲の峰

須藤美智子

春の雪囁くやうに降りにけり
春立つや予約の本を受け取りに
大空に夢の詰まりししやぼん玉
秋篠や紅一休てふ椿咲く
棚霞む辺り軍場関ヶ原
吟行の途中一杓仏生会
大磯の駅舎は我が家燕の子
高速道雲の峰まで続きをり



河童橋渡り登頂す夏の山
朝には鳥夕べには遠蛙
送り火に草の揺るるは父と母と
蚕豆の過保護に育つ葵の中
すべり台込み合つてをり小春かな
水澄みて流れの速き乃木用水
五合目の霧の中より切手買ふ
暖房の列車に訛聞いてをり
枯葉枯葉日当る方へ舞ひにけり
ひとり来て漫画館前落葉踏む
働いて深き睡りへ干蒲団
語部の頬に一筋冴返る

新人賞作品

回転木馬

奥田茶々

雲海を越えちちははに近くなり
炎天の渋谷の人波発酵す
天高し大きな耳の調律師
蔦紅葉ミレーの心にふれる旅
どんぐりの目深にかぶるベレー帽
菩提子の触るれば鈴の音の乾く
初冬や水槽めきし神輿庫
保安官のバッジの飛びし寒昂



悪筆の護摩木も積みぬ露の臺
護摩焚の指ひらひらと春めきぬ
仮面売るベニスの迷路春燈
暮れぎはの魔女の爪めく紫木蓮
高窓のミモザ明りや四部合唱
花の奥その又奥へ人力車
春の雲回転木馬に翼あり
耳瘦せて陽の透き通る薄暑かな
突つ掛けて出てみる卯の花月夜かな
十葉や静の草屋に静の文字
伸び出して竹の子一角獣となる
コーランは百十四章梅雨の蝶

◇特別作品◇(抄)

忙中日記一週間

館

泰生

八十七回目同期の歩き秋高し
小塚原仕置き二十万そぞろ寒
冷やかやお伝次郎吉眠りをり
弾痕の残る黒門木の実落つ
千住大橋「細道」偲ぶ秋の風
万年幹事一人作業の夜長し
「賀状無礼します」友の便りや桐一葉
秋色を横眼に句会三時間

茸飯吟行弁当予約する
区民ウォーク下見の里や水の秋
短日や施設の母の手を握る
整体治療手入れをささ新酒酌む
文化の日栄養テスト合格す
体脂肪検査十歳若しと秋うらら
釣瓶落し花苗買ひの一往復
松手入見様見真似の一時間
下見するむらさき橋に秋惜しむ
はしやぎの鴨の一陣井の頭
落着きし吉祥寺かな温め酒
忙中閑消えて「二十句」夜なべかな

風土集



神蔵器選

枯蓮仏と命つなぎぬて 東京 柴田 久子

平泉古図の中より秋のこ糸
弁慶の討たれしところ草紅葉

看板の長き脚見ゆ大刈田
仏見しより冷まじき夜の鏡

ちちははに夫を返す日赤まんま
行く秋や風呂敷包みの夫を抱き

秋蝶の微熱の羽を休めをり
白々と胸の奥まで十三夜

マリオネット上野の森に木の実落つ
椎の実をにぎる判官自刃の地

伽羅御所跡柳の御所跡つづれさせ
中尊寺までの一里や小豆干す

直刀の螺鈿の柄や秋逝けり
かつし団子

深秋の団子に付きて葉缶来る
大雨を離陸してきて今日の月

更待月隈無き空となりにけり
優勝は青空組や運動会

石路咲いて兜太の句碑は太鼓腹
朝寒や空の青さを降り注ぐ

大甕の中尊寺蓮枯れにつく
棒立ちす出合ひ頭の穴惑

木の実入るポシエツトありぬ縄文館
身に入むや子供ひとりの一区画

遣り水を凹ませ秋の雨音す
東御苑 池田加代子

色変へぬ松や菊御紋葵紋
絹雲やこころ正倉院展へ

米蔵に米積まれゆく良夜かな
横浜